

# 世間解

第四一五号

令和四年九月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

— 信仰 —

九月であります。何かと落ち着かない日が続きますが有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご聴聞のことと存じます。

「我亦在彼撰取之中」といふは、われまたかの撰取のなかにありとのたまへるなり。「煩惱障眼」といふは、われら煩惱にまなこさへらるとなり。

「雖不能見」といふは、煩惱のまなこにて仏をみだてまつることあたはずといへどもといふなり。「大悲無倦」といふは、大悲大悲の御めぐみ、ものうきことましますと申すなり。「常照我身」といふは、「常」はつねにといふ、「照」はてらしたまふといふ。無礙の光明、信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。「我身」は、わが身を大悲大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまふとおもへとなり。撰取不捨の御めぐみのころをあらはしたまふなり。「念仏衆生撰取不捨」（觀經）のころを釈したまへるなりとしるべしとなり。

親鸞聖人の『尊号真像銘文』というお聖教の二法語であります。思いきって意を取ってお聞かせいただけば、

私は阿弥陀さまの「必ず救う」という撰取のおはたらきの中にある。私の、自分勝手にしかものごとを考えられない煩惱に染まっているこの眼では阿弥陀さまのお救いのおはたらきをハッキリと見て確認することは出来ない。その私に阿弥陀さまの救いの法は途切れることなく、私を照らし続け護り続けてくださっている。そのおはたらきは決して止むことなく私を包んでくださっている。阿弥陀さまのよってお念仏申す身にならしていただいたものはそう安心させていただいてよいのですよ。

というようなことでしょうか。

山本仏骨和上（うろ覚えなので和上に失礼があつてはいけないのですが）は「ご法義に懐かしさがなければ信仰にならない、信仰にならないからご法義が日暮らしに活かないんだ！」ということをおっしゃっていました。

懐かしさは寂しさや喜びや辛さや感謝を含めた暖かさです。

信仰ということをおもいます。

信じて仰ぐ。仰ぐものを持たせていただくことの大切さを思っています。

仰ぐものは私を包んでくださるものであり、そうなのだと思えてくださる方をまた師匠と仰がせていただくのではないのでしょうか。

師匠とはなにも有り難い先生だけではありません。親でも家族でも友人でも小さい子どもであっても、師匠になり得ます。

師匠とは自分に進むべき方向を指し示し、自分を育ててくださった方であると共に自分を律し続けてくださる方でもあるのでしょうか。

親鸞聖人は法然聖人からそんなことを受け取られたのではないかと思ひます。

仰ぐものとは自分を包むものということがあります。

仰ぐものを持たないと私は傲慢になりはしないでしょうか。

仰ぐものを持たないと私は自分以外を見下すようになりはしないでしょうか。

仰ぐものを持たないと私は自分だけが正しいと思うのではないのでしょうか。

仰ぐものが自分や他に恐怖を与えるならばそれは仰ぐものではありません。

仰ぐものを持つということはとても大切なことであると思ひます。合掌

